夏の信州での一日の清遊

韮澤嘉雄

「お母さんはどうしておられますか」――大平総理は何よりも先に私にこうきかれた。昨年二月十四日、宮崎吉政、田中洋之助、内田健三、それに私の評論家四名が私邸に朝食にお招きいただいた時のことである。「三年前に八十でなくなりました」と申し上げると、「それはそれは」と総理は両手を胸において祈るようにされた。

話は昭和四十五年八月二十四日に遡る。この日、私は長野県坂城町にある日精樹脂工業の常務（現専務）で上田中学時代からの親友、室賀千秋君と、同社を視察していただくため、大平さんを軽井沢の別荘にお迎えに行き、途中、小諸の実家にお立ち寄りいただいた。ちょうどお昼どきであった。かねて秘書の方から「オヤジさんの好物は讃岐のばら寿司」とおききしていたので、何とか似たものをと、母と家内が五目寿司を作って差し上げた。大平さんはニッコリして「おいしい」とおかわりまでして下さった。母と家内は感激して一段と熱烈な大平ファンになった。大平総理は、この時のことを憶えておられ、私が母の死を幹事長でお忙しくしておられた大平さんにはお知らせしなかったので、その後どうしているかおたずねになったのである。その夜、私は母の霊前にこのことを報告した。母は泉下でさぞ喜んだことであろう。大平総理はこういうやさしい心の持ち主であられた。

拙宅で、私は大平さんに揮毫をおねだりした。快く「進退問天　栄辱従命」と色紙にお書き下さった。この年の三月十二日に還暦を迎えられた時、自誨の道標とされた言葉である。この色紙は今も小諸の家にかけてある。

それから大平さんは、小諸城址をご覧になり、午後二時、日清樹脂に着かれた。青木固（かたし）社長（現会長）、島喜

治専務（現社長）らの案内で工場を視察、社員に講演のあと六時から上山田温泉で日精首脳の歓迎の宴。乾盃のあと大平さんが開口一番、「きょうはきれいどころがずらりと並んでいるが、私と青木さんはまずい顔ですなー」といわれたので芸妓さんたちがどっと笑う。「いや、大平さんのは中国では〝異相〟といい、そんじょそこらにはない、天下を取る相だ」と青木さんがいう。「そうだ、そうだ」とまた乾盃。大平さんはごきげんだった。

青木さんは発明家。特許を四百も持っている紫綬褒章受章者。「英雄、英雄を知る」で、私が一年前にご紹介した瞬間から大平さんと以心伝心の間柄になった。また日精は地方にありながらプラスチック射出成形機生産額、台数ともに世界一。大平さんは発明の重要性や田園都市構想の視点から、青木さんと日精に注目したのであろう。

その夜は愉快に語り合い、九時すぎ大平さんを室賀君と軽井沢までお送りした。帰京して数日したら、太平会の創設者、松本正雄さん（私どものご媒酌人であられる）からお電話。「韮沢君、有難う。大平君が君のお蔭で信州で思いがけない一日の清遊をしたと、きのう太平会で皆に披露したよ」とおっしゃる。嬉しかった。

このほかにも大平総理の思い出は尽きない。大平さんは、私の一橋時代の恩師、米谷隆三（まいたに）博士のところに同郷の関係でよくおいでになっていた。そのため、また松本さんのお口添えもあって、私は学生の時から四十年近く大平さんにご指導いただく光栄に浴した。その間、官房長官の時、如水会報で対談していただいたこと、日本寮歌祭にご出演いただいたこと、田中内閣の外務大臣の時と幹事長の時の二回も私どもの世界経済研究協会でご講演いただいたこと、毎年元日に私邸で楽しくお話いただいたこと、如水会の大平総理祝賀会のこと、冒頭にふれた朝食会のことなどが走馬燈のように瞼に浮かぶ。これらの機会に私が接した大平総理は、偉大な政治家であられるとともに、教育者、宗教家の一面を色濃く持っておられた。大平総理のように良心的で、読書家で、思索する、彫りの深い哲人宰相は、当分、日本には現われないであろう。

（世界経済研究協会専務理事）